

親鸞聖人讚仰特別布教大会ご法話  
「行えば“聲名の”道がつく」

浄土真宗本願寺派正覚寺愚住  
堅田 玄宥

# 親鸞聖人讃仰特別布教大会ご法話構成

【日 程】平成24年9月8日 高島組親鸞聖人讃仰特別布教大会

【講 題】「行えば(称えれば)“**聲名(しょうみょう)の**”道がつく

【ご法話の構成】

1) 導入→お聴聞の伝統の大切さ、

沖縄の真常寺様のご法座の赴き、当院の取組のご介から、称ふれば“聲名の道がつく”本題ご紹介

2) 仏教とは何か

仏の教え→釈迦の教え→釈尊亡きあとは経典→教法は声の如し(Ref『散善義』七祖註釈版p469)

仏即教→真理即教えですが、転じてお法りを頂戴された方がいらっしゃるものが即教えであります。

仏になる教え→教行証

行は単なる一つの行いではありません。行えば道がつきます。これを業道といいます。

浄土への白道がつけば、道を通して、おさとりの世界から大悲の働きが届いて下さって、導いて下さるのです。

3) アングリマーラのお話

4) 教行証、証果の悲用、妙好人の日暮らし(栃平ふじさん)

5) 悪人を救うみ教えが開かれたからこそ、この私にお浄土に生まれる道が開かれて下さったのです。

・「来たれ」との阿弥陀様の勅命に呼応して「往け」との釈尊の発遣のお声が背中を押して下さいます。

・南無阿弥陀仏と称えれば直ちに聞こえて下さる南無阿弥陀仏が阿弥陀様のお喚び声であり、讃嘆しつつ私の背中を押して下さいますお釈迦様の声だったので。 教法は声のごとし。

・では、この機会にご一緒にお念仏申しませう。

# 浄土往生は成仏の道路

- ・安楽仏国に生ずるは
- ・畢竟成仏の道路にて
- ・無上の方便なりければ
- ・諸仏浄土をすすめけり

(Ref: 高僧和讃: 曇鸞讃43、註釈版聖典P585)。

# 沖縄の真常寺様のご法座から

正覚寺報平成24年9月号

- 縁あって沖縄の真常寺様の北村 昌也ご住職様には、昨年の第47回龍谷教学会議での研究発表のご縁に続いて、本年度安居に同席させて戴きました。
- ご住職様のお話では、三十年前に現地へ赴き、コツコツと地道にご法座活動を開拓してみえたところ、今では毎週のようにご法座が営まれるようになったとのお話でありました。
- 「常例布教」、「歎異抄講座」、「沖縄の習俗と浄土真宗」「連続研修会」等が毎日曜の十時からお勤まりになり、毎回四五十人のお同行が御夫婦でお参りになるとのことです。また月末の金曜日の夜には気楽な「飲み会」を開催していらっしゃるとか。
- 嘗て、周囲にはまったくお寺等がなかった村でありましたが、今では、真常寺様のお同行として皆様がご法義に親しんでいらっしゃるとお伺い致しました。

# 当院のご法座活動から

正覚寺報平成24年9月号

一方、当院のご法座はどうかと申しますと

- 本年度初会合の仏教壮年会総会で「毎月の例会をご法話会(お聴聞の会)にしようではないか」と御発案戴きました。
- しかも、ただ住職だけをお願いしていたのではお同行が受け身になってお参りが少なくなるとも限らない。「ここは、私達の企画として立ち上げたい」と云って戴けたのです。なんと有り難いことでしょう。
- 住職はその足で、心当たりの若手の布教使の許を尋ねました。布教使様が二つ返事を返して下さったのは申しまでもありません。
- 爾来、コツコツと、毎月の例会活動が住職と布教使様の二座のご法話会(お聴聞の会)となって営まれております。
- お聴聞のお同行は、確かにかつての淋しげなお参りの倍にはなりました。
- ご法話の後は、ご法話の反省会が遅くまで続きます。

## 宗門へのご提案

- お聴聞のコミュニティを復活させるために、プロジェクトチームを組んでご法座の人集めから定着まで、全国の末寺を展開して布教現場を開拓する地道な活動を立ち上げて戴いては如何でしょう。
- 布教使様の力量開発の現場を確保することにも繋がります。
- できれば、お東さんにも共同歩調の声を投げかけて戴いてはいかがでしょう。
- 末寺末端では東西は共同の生活空間を形成しているからです。
- その成果を以て五十年後のご遠忌をお迎えするなら、**聞の宗教**( )の面目躍如と成る筈です。
- 浄土真宗は聞の宗教です。お聴聞のご法座活動が命です。

# 行えば“聲名の”道がつく

本日は、日常生活に生きる姿から、新たなご法義の頂戴しぶりをご紹介したいのです。

- それは、本願のお念仏を頂戴してお育てに与って行く素朴な取組みです。
  - 如来様は、「お願いだからお念仏しておくれ」と願っていて下さいます。
  - だから、衆生(私)は、仰せの通りに、お念仏するのです。
  - お念仏すれば、単なる行いには終わらず、道がつくのです。
  - 道は、**称えれば聞こえて下さる聲名の道**です。道は、おさとりの世界に繋がっています。
  - 道の道たるゆえんは、行く人あれば還る人のある往来にあります。
  - 浄土真宗では、何よりもおさとりの世界から如来様のお慈悲の働きが届いて下さいます。
  - そのご縁に遇わせて戴くために、如来様の願いの通りに( )お念仏させて戴くのです。  
ここで、「如来様の願いの通りに」というのが、浄土真宗の「信心」の相(姿)であります。
  - 凡夫の疑いの蓋が取り払われた瞬間です。
  - その途端、如来様のまことのお心(本質はお名号)が凡夫の胸の裡にお宿り下さいます。
  - 同時に、凡夫は如来様のお慈悲に包まれるのです。
  - お名号がお宿り下さり、如来様の懐住まいが始まるのです。
- 「親さまの智慧と慈悲とをいただいて、ねるもおきるも なむあみだ
- **親さまのほところずまいと知らなんだ**というのは、**妙好人**栃平ふじさんのお言葉です。

# 人間が健康に生きているとは

Ref) <http://www.japan-who.or.jp/commodity/kenko.html>

## 1. 健康の定義 (WHO憲章 前文)

Health is a state of complete **physical, mental and social well-being** and not merely the absence of disease or infirmity. 1) **身体的**、2) **精神的**、3) **社会的に申し分なく、病気/虚弱ではないこと**

## 2. ところが、人間が本当に健康であるにはこれでは足りないとして1998年に見直提案された。

Health is a **dynamic** state of complete physical, mental, **spiritual** and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity.

**dynamic** は、**静的に横たわっているだけではたりない**

**spiritual** は、**人間の尊厳の確保や生活の質の上で本質的**

**執行理事会で賛成22、反対0、棄権8で採択されるも総会では見送られた。**

## 3. 理由は、日本部会で反対されたのが原因だと言われている。

日本語では、**mental** も **spiritual** も“峻別できず、ビジネス界では**Spiritual**は不要だった。

## 4. **Spirituality** は、鈴木大拙が「**靈性**」と翻訳した言葉に該当

- 人間は、自分一人が自分の能力で生きて居るという認識だけでは決して健康だとは言えず、
- **自らもその一人と顧みつつ、**
- **苦悩を抱えて生きる隣人への同悲・共感の眼差しがなければ、人間として健康とは言えない**という理由に基づきます (Ref 本田 弘之 『親鸞思想の原点』P105)。

# 仏教とは何か(仏教の三義)

1. 仏の教→釈尊の教え、経説の教えを云います。善導大師は、釈尊おかくれ遊ばした後の世であっても、教法は「声の如し」とおっしゃったのです→釈迦の発遣(Ref『観経疏』)。
2. 仏即教→真理(ダルマ)即教ですが、転じて、釈尊が悟られた不滅の真理を体得した人( 1)が目の前にいらっしゃること自体が後続の者にとって教えになるのです。  
1→**Spirituality**を開発した人( 2)、換言すれば、お悟りの神秘体験を遂げられた人、  
2→**Spirituality**を開発した人の例として、鈴木大拙氏は、**妙好人**を挙げられます。  
浄土真宗では、信心獲得して現生正定聚となられたお同行を指します。  
→篤信の祖父・祖母の後ろ姿が孫を導くのです。

## 3. 成仏教→仏に成る(証りを開く)教え

・教・行・証のプロセス(全仏教の伝統)よりなります。

**教**(み教え)をお聞かせに与り、

み教えの通りに**行**ずれば、

仏の**証**りを開くことができるのです。

教

行

証



# Spiritualityをどう捉えるか(その1)

Ref 大谷光真「愚の力」P156-167.

## 1. Spiritualityの定義(翻訳)と実践例

・鈴木大拙師は、Spiritualityを“靈性”と翻訳して、その実例を下記の通り例示されました。  
但し、両者は→記載に示す相違があります

ア)自身の参禅見性体験→自己にもともと内在するとする仏性(=“己身の弥陀、唯心の浄土”)を磨き出すことによって悟りを開きます。これは浄土真宗のおさとりではありません(Ref『信文類一別序』註釈版聖典P209)。

イ)浄土真宗の妙好人→煩惱具足の凡夫には磨き出して悟りを開ける手掛りはありません( )。  
凡夫は、自のはからいを捨て、仏の本願力(他力)回向の行信に委ねるより他はありません。  
Ref『化身土文類』-三経隠顕「濁世の道俗、よくみづからおのれが能を思量せよ」  
→「さとりを開き仏となる能力が自分にあるかどうかよく考えよ」(Ref P148)。

## 2. 神秘体験、Spirituality開発だけを前面に押出すことは危険(Ref P156-7趣意)。

自己が顧みられる(機の深信)過程が欠落した儘で靈性開発を謳いあげる取組みは危うい。

反社会的行動に繋がった新宗教の事件がこれを如実に物語っているからです。

機の深信が伴わないSpiritualityとか癒し(healing, Cure)は、Counselingや医療の治癒次元に留まります。

例)千の風では真の救いはありません。 まったく自己が顧みられていないからです。

# Spiritualityをどう捉えるか(その2)

Ref大谷光真「愚の力」P156-167.

## 3. 機の深信の体験が必須

1) 如来の智慧の光に照らされて、愚かな凡夫である自己の姿に目覚める体験が必須だからであります。

2) “機の深信”を賜るには、浄土真宗の“お聴聞”の伝統が最も信頼できるプロセスと解されます。

・如来様のお慈悲のお育てに与ったお同行は仏に等しい→篤信の祖父・祖母の後ろ姿が孫を導いて下さいます。

お育てに与られた方(現生正定聚)がいらっしゃること自体が後続の者にとり教えになるからです。

3) 教行証(前・後述)、四聖諦という行動を伴ったプロセスに実践的に陽の光を当てて行くことが大切になります。

行いは単なる一つの行いではなく、業道だったからです。

・四聖諦→苦諦、集諦、滅諦、道諦

【苦】→サンスクリット語でのもともとの意味は「思い通りにならないこと」(Ref大谷光真「愚の力」P162-167)。

集→苦の原因、滅→苦しみを滅した証りの境涯

道→苦滅に至る“道”(→八正道) 正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定

# プロセスに当たる「行」とは何か

2012年9月断章第1号

- 行い(業)は、単なる行為ではありません。
- 行えば道がつくのです。
- これを「**業道**」といいます。
- 道がつけば、更なる行いが容易となり、  
**道のめざすものがやってきます。**

道は、往来してこそ道だからです。

(Ref師の言葉によりて)

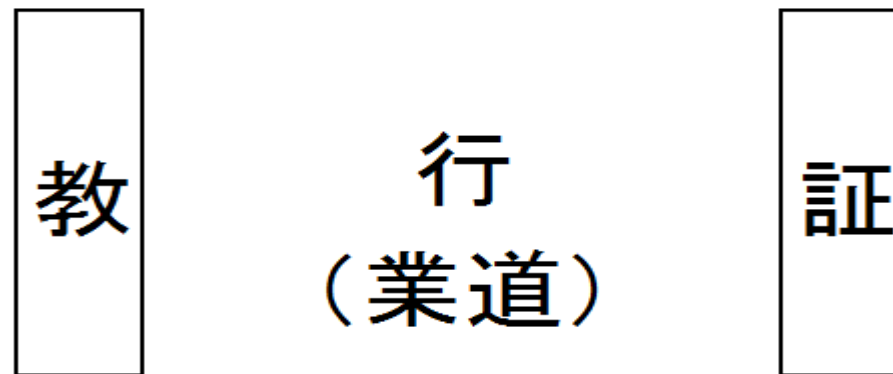
# アングリマーラのお話

Ref) りびんぐらいいぶず断章平成24年9月断章第1号  
「アングリマーラが耐えてくださったればこそ」

# 仏になる教えのプロセス

2012年6月第4号

- 教えをお聞かせに与り(インプット)、教えの通りに行ずれば(プロセス)、
- お証(さと)りを開くことができます(アウトプット)。してみれば、
- 教・行・証は、**プロセスアプローチ**だと見る事が出来ます。



- 行は、単なる行いではなく、行えば証りに至る道が繋がって下さいます。
- 仏願に誓われた行だったからです。
- 道が繋がるとお証りの方から大悲の働きが届いて下さるのです (**証果の悲用**)。
- (一方、悪業は、悪業の目指す世界に道が通じます。道が通じると、悪業の世界が目指すものが働きとなってやってくるのです。)

# (結論) 証果(しょうか)の悲用(ひゆう)

- 曇鸞大師は、証に通じるプロセスを「道路」だとおっしゃいました。
- 「道路」は、一方通行ではありません。行き交うものが道路だからです。
- 道が付けば、ゴールであるお証りの方から「働き」がやって来て下さいます。
- 教えにもとづく業道のめざすもの(さとり)が大悲のお心から働きだしてきて下さるからです。だから、
- 源空聖人も、衆生に取って大事なことは、「行いの道に入ること」だとおっしゃったのです。
- 行いとは何か、阿弥陀如来のご本願によって与えられた「大行」をご本願の思し召し通りに( )仰せに従って「行ずること(お念仏すること)」なのです。
- 教行信証の四法は、すべて本願力廻向によって衆生に与えられるのですが、
- 証りについては、特に「証果の悲用」といわれてきました。
- 真実なるものは、仮なるもの、偽なるものを捨て置くことができないからです。
  - 注:「ご本願の思し召し通りに」とは、「疑蓋無雜」の信心の相(姿)であります。浄土真宗で「信心一つでお救いに与る」と言われるのは、このことを指します。決して行と分離した信心ではなかったのです。敢えて言えば、行の上での信、如来の仰せの通りにお念仏するという、お念仏の称えぶりを明らかにして下さったものこそ「信」に他ならなかったからです。

# 妙好人の日暮らしー親様の懐住まい

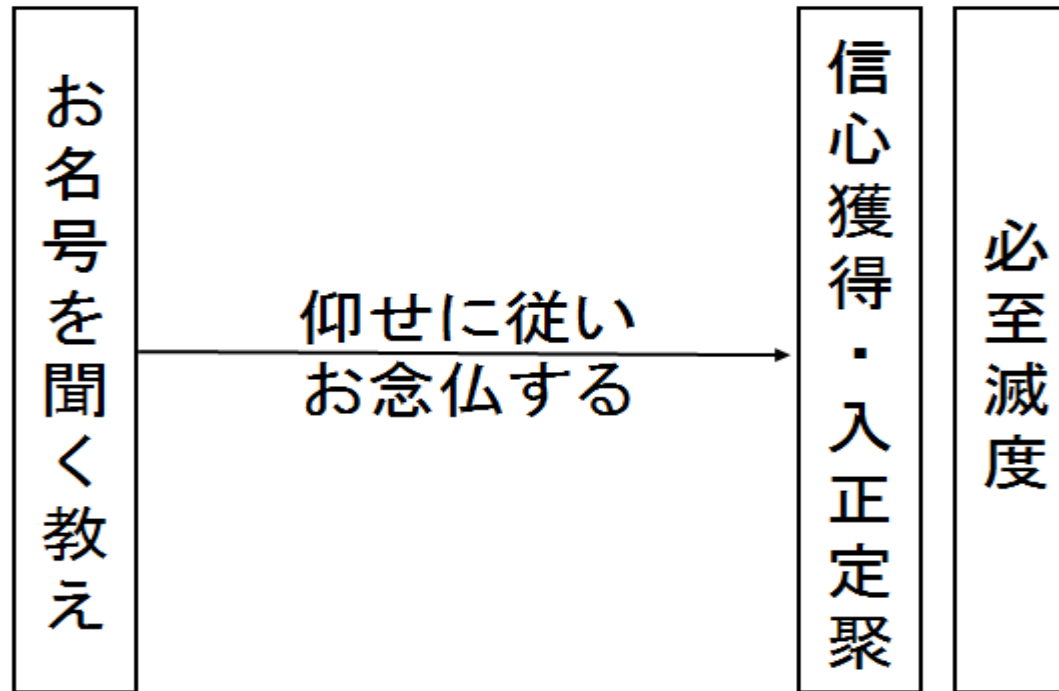
瓜生津隆真「信心と念佛」P52

- 親さまの智慧と慈悲とをいただいて
- ねるもおきるも なむあみだ
- 親さまのほところずまいと知らなんだ
- ああ、ありがたや、しやわせじゃ
- なむあみだぶつ
- 法蔵はどこに修行の場所あるか
- みんな私の胸のうち、なむあみだぶつ

( 栢平ふじさん )

# 浄土真宗の教・行・証

2012年3月第1号



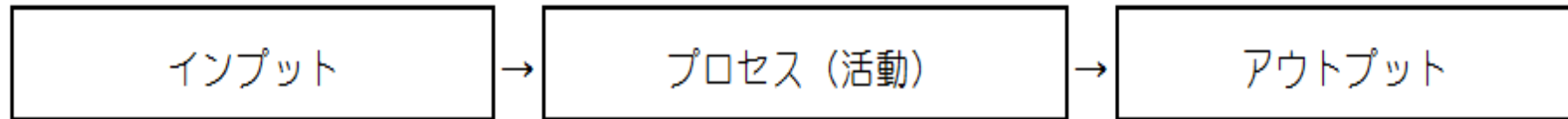
- 教→名号をお聞きかせに与るみ教えだと頂戴して
- 行→如来様の仰せに従ってお念仏すれば  
信(疑蓋無雑) 行(称名行)
- 証→信心(金剛心)を賜って現生正定聚に入ります。



# 浄土真宗の教・行・証

2012年3月第1号

信心獲得次第相状は、仏教の「**教行証の構造**」に則り、ISOのプロセスアプローチそのものです。

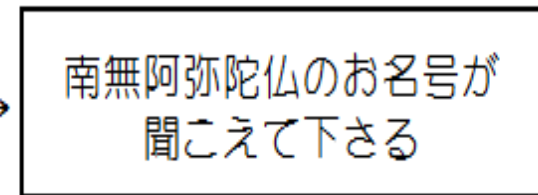
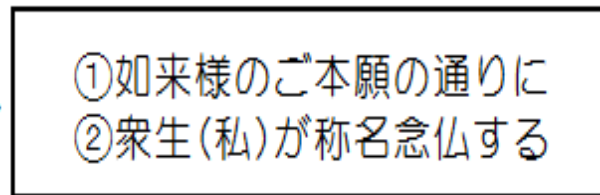
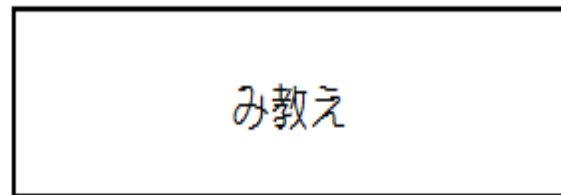


如来様の本願力は常に働いて下さいます。それ故、衆生（私）は、み教えに遇わせて戴き、賜った念仏行を行じるとき、名号（願力）を聞かせて戴けるのです。

教

行

証



御本山の聖典編纂のご努力があり、僧侶の研鑽と熱意があり、祖父母のお念仏の姿という土徳があつてみ教えが伝えられます。

↑  
仏回向の行が行ぜられるとき  
①②は不離「行信不離」の相状を保っています。

↑  
これを願力を聞くという聞くことは信心を頂戴したことを意味します。

# 聞即信で現生正定聚の道が開かれる

- 前コマで「証」を「聞名」で表現したのはなぜか？
- 「第十八願成就文」に「聞其名号信心歡喜乃至一念至心回向願生彼国即得往生住不退転」と一聯に謳われているからです。
- 信心と利益が同時に得られるからこれを信益同時( )と申します。
- 本願招喚の勅命を聞くことは、信心を賜ることに他ならず、そのとき、現生において不退転の位に就くことに他ならないからです。
- 浄土真宗では、信心一つでお救いに与ると言われます。そのように聞くと念佛と信心を別々にして悩むのが凡夫のはからいであります。
- でも、凡夫にとって、私はこれでいいんだろうかと顧みつつ生きることは大切でも、念佛か信心かの悩みは無用であります。如来様は、称えよとの仰せなのですから、仰せの通り(=信心)称えさせて戴きましょう。すると聞こえて下さった南無阿弥陀仏が私を包みこんで白道を共に歩み、遂にお浄土につれて行って下さるのであります。
- ただ、しかしながら、信益同時と言っても、理念と解するのが無難です。なぜなら、現生十種の益の一つ「常行大悲の益」のお徳が身につくかどうか(広い心と豊かな力量)は、その後のお育てによると解されるからです。
- 賜った信心の中にまた賜る証を明らかにしていくという布教の仕方が今まで疎かではなかったかと本田師はご指摘になります(Ref本田 弘之 大谷派親鸞仏教センター所長『親鸞思想の原点』…めざめの原理としての回向…(法藏館刊)P118)。